シーナの事情

イチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シーナの事情

【Ｎコード】
Ｎ４８７３Ｙ

【作者名】
イチル

【あらすじ】
レキルス王国の王都ガレストラにある本屋『サクラ』を営むのは、日本から能力を持って異世界トリップしてきた少女、田宮椎名。
これは本屋（でも裏では情報屋）な彼女とそれを取り巻く周りの人達の友情恋愛その他もろもろの事情。＊＊＊＊毎回２３時に更新します

1　彼女の事情

ガレストラは今日も賑わいをみせていた。
多くの歩行者よる騒音の中に売り子娘の少し高めの声が響き、人々は思い思いの店で互いに有益になるよう買い物をする。
ある人が興味なさげに視線を外したモノを、他の人が輝いた瞳で見つめたり。
大金を軽く払う人もいれば、お金が足りずに溜息をつく人もいる。
その顔は十人十色。

レキルス王国の主な産業は武器。
その王都であるこの街は、良い武器といえばガレストラ、と言われるほど有名で、それを扱う騎士たちの腕も大陸一だ。
そんな街だからもちろん殆どの店が武器屋。
そのかわり武器屋の競争率は激しいが、他の店の中には街に一軒しかない店などもあるので、そういった店は客を一人占めできるのだ。

そんな街に一軒しかない本屋『サクラ』を営んでいるのが、この私。
シーナ・ターミャ、もとい田宮（たみや）　椎奈（しいな）。
3年前、15歳のときに日本から異世界トリップしてきた本好きの少女だ。
この店は、その際に神様から貰ったもの。

本に関わる仕事につくのは小さい頃からの夢だった。
もともと私は知識欲が他人と比べて凄くあり、世界の全てを知りたいと常々思っていた。
まぁ、それは無理だとは分かってはいたが。

体が弱く生まれた頃から入院中だった事もあり、よく本を読んでいたら段々とその魅力にとりつかれてしまった。

そんな所を神様に気に入られて強制的に異世界トリップさせられた。
願いを3つ叶えてあげよう。
そう言われて、言った願いの1つ目が「本屋の店長になりたい」である。
どうやって叶えてくれるのかな～と思っていたら、トリップした先に助けたおじいさんが経営していた本屋を「もう自分は年だから」と言い、くれたのだ。
そのおじいさんは今、隣国にいる息子夫婦の元に住んでいる。

2つ目の願いは「身体能力の向上」。
理由は今まで外で遊んだ事があまりなかったため、向こうではめいっぱい楽しもうと思ったからだ。
あの神様はついでに魔力も最高にサービスしてくれた。
おもいきり楽しんでこい、と。
ちなみに隠しているが魔力量と質は世界で1番、剣技では宙に投げた玉ねぎのみじん切りを2秒でできるくらいだ。
チートやばい、そして便利。
おかげで今は異例の早さでギルドランクBだ。

3つ目は「その世界の全てが知りたい」。
国家の秘密から隣の家の晩御飯まで、全て。
そう言ったとき神様は満足気に微笑んで、一冊の本をくれた。
今、私の横においてある鈍色の本がそうだ。
表紙の絵も題名もない中身も白紙なこの本は、実はこの世界の知識の塊。

知りたいと思った情報だけを載せてくれる神様特製の本。

例えば私が「あの人誰だっけ」と思いながら本を開くと、その人物の名前と生年月日、家族構成や育ち方、周りからの評判まで書かれている。
プライバシー皆無もいいところ。

まぁ、こんな能力もあって実は私は本屋件情報屋だったりする。

1―2

カランコロン

「いらっしゃい、レオンさん。今日はどんな本をお探しですか？」

店の中に入ってきたのは少し波打ったサラサラの金髪に透きとおる海色の瞳の美青年。

それはまるで御伽話に出てくる王子様のような…っていうか王子様だ。

正真正銘この国の皇太子であるレディオン・リンド・フルノ・レキルス殿下。

先ほどの『レオン』という名前は偽名だ。

彼はたまに病弱な妹姫のために身分を隠して本を買いにきている。

勿論、私の情報本にかかれば素性などすぐ分かるので、身分を隠しても意味がない。

別に誰これ構わず個人情報を見ているわけではなく、最初にこの店に来たときに平民と言うわりにはやけに身なりがいいから気になったのだ。

「こんにちは、シーナ。今日も妹のために本を買いに来たのだけれど…」

「じゃあ、この本なんてどうですか？今流行ってる恋愛小説。私のオススメですよ」

私が近くの棚から取り出したのは桃色の本。

ノイズというこの本の作者は他国の間でも有名で、毎回ベタで甘い

ラブストーリーを書くので女性受けがいい。
そんな大物小説家の彼女は私の友人でもあるのだが、この話はまたの機会に。

レオンは本を手に取りパラパラと中を見る。
そして、最後まで見終わった後のこちらへ向ける視線はとても満足気だ。
それに対して私もニッコリと微笑むと、途端にレオンの顔が真っ赤になる。

何故に？
たまにこういった事があったのだが、理由が分からない。
そのたびに王様ってポーカーフェイスが大切なのではないのか、と彼の将来が少し心配になる。

そして、しばらくの間の沈黙。
2人ともが何を話そうか考えているときに、急に本屋のドアが勢いよく開いた。

「シーナいる？」

入ってきたのは茶色の髪をポニーテールにくくった女。
その手には朱色の宝石がついた銀色の杖。

彼女はアイリス・キュート。
Aランク冒険者の魔法使いの私の友人で、レオンの元クラスメイトでもある。
レオンが通っていた学校、となると一国の皇太子が通うような学校なのだが、彼女は実は孤児院出身だ。
魔力量の高さをかわれて無理矢理入学させられたらしい。

その卒業後には数多の勧誘を振り切って冒険者になり、今は各地を転々と巡っている。

彼女と出会ったのは私が暇つぶしにギルドで依頼を受けていたとき、討伐対象も倒してさぁ帰ろうというときに邪竜と戦っている彼女と出会った。
苦戦していたようなので手助けをしたのが切欠だった。

という話は閑話休題、またいつか。

「いらっしゃいませ、アイリス。今回はどんなものをお探しで？」

助かった、アイリス。
あの気まずい空気は苦手だ。
とりあえず、まだ顔がほんのりと赤いレオンは置いといて、アイリスの相手をしよう。
それにしてもレオンは美形だから頬を染めると乙女にしか見えない。

「ん？レオンはいいの？まぁいいや、この本の修理を頼める？」

そう言って渡されたのは特に壊れた様子もない普通の本。
これのどこに直さないといけない所があるかというと……そんなものは、ない。
だが私は困った顔もせず、逆にニヤリと笑った。

「分かりました。少々お待ちください」

そういうと、私はその本と傍らの鈍色の情報本を持って店の奥に入った。
さて、情報屋としての仕事がんばりますか。

1―3

『壊れた本を直してほしい』

それは私に情報屋としての仕事をしてほしい、という意味。

本の３３ページ目に欲しい情報とお金を挟んで私に渡す。
私はそれを受け取り、そのお金に対応する情報を書き本の２２ページ目にそれを挟み、客に渡す。

それが情報屋『サクラ』の利用方法である。

私はアイリスから受け取った本を開いた。
左下に３３と記されているページには、ルール通りに紙と紙幣があった。

今回の依頼内容は『ローズ・テファ・メルシスについて』。

ついにここまできたかぁ、と思う。
ローズ・テファ・メルシスというのはアイリスの生き別れの母親の事。

彼女の母親は隣国の侯爵家の末娘で平民の男と恋をしてアイリスができ駆け落ちをした。
しかし彼女の父親がそれを許さず、男を殺して末娘を連れて帰ったのだ。
母親は父親が来る事に気づき、父が来る前にアイリスを孤児院に預

けたのだ。
この事は神製の情報本で知ったのだが、多分彼女は孤児院の院長から聞いたのだろう。
取り出した紙に、もうここ3年で使い慣れた羽とインクを使って情報を書く。
本来なら個人情報、ましてや貴族の料金は高いのだが、アイリスは私の友人なのでサービスでいくつか情報を付け加えて、本に挟んだ。
店の方に出るとアイリスとレオンがなにかを喋っていたがすぐに止まり、アイリスは少し緊張した顔でこちらに顔を向ける。
あ、レオンの事を忘れていた。
「シーナ…見せてもらってもいい？」
「どうぞ」
本を渡す。
その表紙には『護身術の全て』と題名が書かれており、毎回この本を持ってくるのが彼女らしい。
受け取った本をパラリとめくり、２２ページ目を開く。
アイリスは内容を読み進めていき…泣きそうな顔になった。
「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ」
少し涙声になりながらアイリスは告げた。
そして、パタリと本を閉じて出入り口に向かう。

「ご利用ありがとうございます。次はお二人できてくださいね」
頭を下げた。
すると、アイリスは吃驚したように目を開いて、その後笑いながら言った。
「分かった、ありがと。…がんばれよ」
ん、何を？と思いながらも店を出て行ったアイリスを見送った。
また、店内に沈黙。
残されたのは私とレオン。
案の定、彼は一連の出来事の意味が分からず頭にハテナマークを浮かべてこちらを見ていた。
私はそれに曖昧に笑う。
「本、買っていきますか？」
そう言って、桃色の恋愛小説を取り出した。
最後に、その日『サクラ』でノイズの新作が一冊売れた事と、後日銀の杖を持った魔法使いがもう1人女性を連れて来店した事をここに言っておく。

閑話　１ー アイリスの視点（前書き）

第１話のアイリス視点のお話です。

閑話　１ーアイリスの視点

「シーナいる？」

私は扉が壊れるんじゃないかという勢いで店内に入った。
ミシリと音がしたので少し心配になったが、今はそんなことはどうでもいい。

『サクラ』の中にはシーナともう1人、
私の学友でこの国の皇太子でもあるレディオン・リンド・フルノ・レキルスがいた。
レディオンは驚いたように此方を見たが、シーナは安心したように私に話しかける。
っていうか何でレディオンは乙女みたいに頬を染めてんの？

「いらっしゃいませ、アイリス。今回はどんなものをお探しで？」

部屋にシーナの鈴のような声が響く。
レディオンは放置するらしい。

「ん？レオンはいいの？まぁいいや、この本の修理を頼める？」

渡したのはここを利用するときに使っている『護身術の全て』。
この本しか持っていないから仕方がないが。

「分かりました。少々お待ちください」

シーナは気のせいかニヤリと笑って2冊の本を持って店の奥に入った。

今回シーナに頼んだのはローズ・テファ・メルシスについての情報だ。
孤児院の院長から聞いたことだが、彼女は私の母親だという。
なんでも切羽詰まった顔でまだ生まれたばかりの私を預けに来たらしい。

「アイリスって本読むのか？」

隣に立つレディオンが聞いてくる。
あぁ、ここではレオンだっけ？
レディオンは彼女が情報屋である事を知らないので、皇太子だとバレている事も知らないのだ。
…こいつシーナの事好きなくせに何にも知らないな。

「友人に頼まれたんだよ」

「アイリスにそんな事頼む友人なんていたんだな」

「どういう意味」

「いや、別に」

レディオンの物言いに、少しイラっとする。

「ハッキリ言えよな」

「いいだろ、別に」

「そんなんだからシーナに振り向いて貰えないんだよ」

「な…っ！」

何故知っている、っていう顔をしている。
いや、バレバレだから。
見ている方が焦れったく、こちらとしては早々に彼らにはくっついてもらいたいのだが。
…そういえばシーナはこいつの事をどう思っているんだろう。
今度聞いてみるか。

ガチャ

レディオンが何か言いかけたとき、シーナが戻ってきた。

一瞬でレディオンの事を忘れ、シーナの方を見る。
手にある先程私が渡した本には、きっと情報が書かれた紙が挟まっている。
私の親の事が書かれた、紙が。

「シーナ…見せてもらってもいい？」

「どうぞ」

本を受け取ってめくる私の手は、情けない事に震えている。

そのページには、いろいろな事が書かれていた。

ローズ・テファ・メルシスの実家、家族、性格から駆け落ちした事、
夫が殺されて子供をキュート孤児院に預けた事。
そしてーーー1番最後に書かれている事を見て、泣きそうになった。

彼女は今も自分の子どもを探している。
貴方は望まれた子ですよ。

「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ」

シーナは知っていたのだろう。
私がその事を気にしていたのを。
孤児院にいる子は望まれない子が多いから。

「次はお二人できてくださいね」

そう言ったシーナの声に、私は勿論と思いながら返事をした。

閑話　過去の話（前書き）

またまたアイリス視点の閑話です。
今回は椎奈とアイリスの出会いのお話です。

閑話　過去の話

シーナは不思議な子だ。

彼女の経営する『サクラ』は本屋でもあり情報屋でもある。
私は本が苦手なのでそれは買わないが、情報屋はよく利用する。
『サクラ』は全く外れない情報屋として裏ではとても有名だ。

私がシーナと出会ったのは今から約3年前。
依頼でとある森に住みついた邪竜を退治しに行ったときの事だった。
今までに倒した事のある邪竜は上級魔法光魔法を放てば1発で倒せたので、今回もそれで大丈夫だと思っていた。
だが、その邪竜は他のものとは桁外れに強く、私が今まで戦ってきたのは邪竜の中でも下位のものにすぎないと気づいた。
どうやら私は自分は強さを自惚れていたらしい。

魔力切れで体が重くなり、どうしようかと悩んでいた頃、唐突に視界が光った。
そして鼓膜が破れるほどの爆音がなる。
同時に、反射的に目を瞑っていたため見えなかったが、微かに邪竜の苦しげな咆哮が聞こえた気がした。

音が鳴り止んで、恐る恐る目を開けると信じられない光景が瞳に映った。
先程まで私が苦戦していた邪竜がいた場所には、その跡形もない巨大な黒い炭の塊があった。

一瞬、思考が停止する。

「あ、大丈夫？」

視界の端にひょっこりと顔を出した少女が、私の顔を覗きこむ。
艶やかな黒髪に宝石のように輝く黒眼。
整った顔だちをして、どこか神秘的な雰囲気を出す美少女がそこにいた。

まさか、こんな少女が、邪竜を殺した？

「これは…あなたがやったの？」

「うん、勝手に参加しちゃってごめんね。倒してよかった？」

「いや…助かったけど」

信じられない。
見たところこの子はエルフでも魔族でもなさそうだし、多分…人間だ。
人間のまだ１０代前半くらいの子が邪竜、しかも中級以上の強さのそれに普通勝てるか？
答えは否、ありえない。

「怪我してるね」

そう言った途端に私の体が光り、傷が治っていく。
この子はあんな強力な魔法を使った後に、まだ魔法が使えるのか？
しかも無詠唱で？

「あなたは誰？」

「私は田宮…じゃなくて、シーナ・ターミャ。あなたは？」

「…アイリス・キュート」

この時の私は、まさかシーナが無二の親友になろうとは思っていなかった。

2　エリシアの病

今日はお店の定休日だ。

ついでに、この世界の時間について説明しておく。
1年は３６５日くらいで６ヶ月、１ヶ月は約６０日で、紫月、青月、緑月、黄月、橙月、赤月と並ぶ。
１週間は６日で、月の名前と同じように、紫の日、青の日、緑の日…となる。
１日２４時間、１時間６０分、１分６０秒というしくみ。
ほぼ地球と同じだ。

『サクラ』の定休日は毎月第一、第五の紫の日と青の日である。
今日は紫の日、つまり連続２日間の休暇の１日目。

する事は毎回決まっていて。
ギルドに行って依頼を受けまくる。
そして運動しまくる、これにつきる。

休暇なら休んだ方がいいのかもしれないが、普段の仕事でカウンターに座ってのんびりする事が多いので休暇くらいは動きたい。
そして前の世界ではできなかった事をしたいのだ。

―＊――――＊―

ギルド内に入ると騒がしかった室内が一瞬静まり返り、視線がこちらを向く。
だがそれも一瞬で、部屋はまた元の五月蝿さを取り戻す。
女性、ましてやまだ十代の子どもの冒険者は珍しいので仕方がないのかもしれないが、ジロジロと私を見るのはやめてほしい。
そう思いながら受付まで歩いていく。

「あら、シーナじゃないの。久しぶりね」

向かった先にいるのは薄緑色の長髪をゆったりと三つ編みにした優しげな女性。
私の馴染みのギルド受付嬢であるネリーだ。
年齢は２５歳で夫と子どもがいる立派な母親なのだが、子どもが学校に通い始めて時間が空いのでギルドマスターである祖父に頼んで受付嬢をしているという、少し変わった人。
たまに夫との惚気話や親バカな発言をしなければ、仕事のできる美人さんである。

「ネリーさん、何かいい依頼ありますか」

「そうねぇ…あ、これなんてどうかしら。新作ケーキの試食、条件は十代の女性」

ペラリと私の前に差し出した紙の依頼者の欄には王宮御用達と呼ばれる超有名菓子店『パティス』の文字。
ちょっと…いや、かなり気になるが今回はやめておく。
とにかく今は運動したい、遊びたい。

…いや、べつに体重が気になるとかじゃなくて。

「…できれば討伐系でお願いします」

「あら、もったいない」

彼女は紙をファイルにしまうと、別の灰色のファイルから似たような紙を取り出した。
確かそのファイルは極秘の依頼とかが入っていたはずだ。
私に見せたそれには、とんでもない事が書いてあった。

脱走を手伝ってください
依頼主：エリシア・リンド・リア・レキルス
報酬：お互い話し合って決めます
内容：みんなが過保護なので城の外に出れません。城下に行ってみたいので、その為の脱走を手伝ってください。

…この依頼主って、もしかして第一王女のエリシア姫ですか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4873y/

シーナの事情

2011年11月29日23時48分発行